

研究分野(国際ビジネス)を志した理由

私が卒業したのは外国語学部で、国際事業に携わりたいという理由だけで、メーカーに就職しました。そこでは、アフリカ向け営業、北米向けマーケティング、米州子会社の事業管理、外国メディアへの広報を担当しました。入社10年目に、海外留学の機会を得て、当時大きく変わろうとしていたロシアと中東欧の市場経済化と日本企業のビジネス戦略について勉強しました。学部時代の落ちこぼれで、しかも経済学も経営学もまったく知らない私が初めて真面目に勉強したのがその2年間でした(失業の脅威が大きかった!)。帰国後、もう少しだけ勉強してみようと、働きながら大学院に通っていたところ、幸か不幸か、本学への就職が決まりました。そして、専攻分野の国際ビジネスを勉強

しながら、みなさんに教えるという立場になり、10年が経過したので

す。
このように見えてくると、国際ビジネス論の研究教育者という職業を積極的に選択したというよりは、国際事業に関わりたい、留学してこんなことを勉強したい、もうちょっとだけ勉強を続けようと考え、行動したことから、結果的に現在の職業(専門)につながったということでしょうか。何段階かのそれほど大きくない可能性が積み重なり、大学の教員

になったわけですが、国際ビジネスの専攻はこれまでのキャリアからの自然な流れであって、特に選択ということではないかも知れません。転職したときに、学部時代の友人がいった言葉が忘れられません。「学生時代、大学教員という職ともっとも遠かった人間が教員になった」と。ちょっと古いけれど、人生いろいろです。

国際ビジネスの魅力を語りだしたらきりがありません。それを知りたい人は私の授業を履修してくださいと逃げておきましょう。というのも困りますので、項目のみ挙げます。ビジネスのダイナミズム、異文化を背景とする多様な人々からの学習、そして何よりも真摯に仕事に取り組み、自身の成長につなげていく人々に接することが国際ビジネスを学ぶ動機づけになっています。

■多国籍企業論
■国際経営論

■国際ビジネス概論

今井 雅和
(いまい まさかず)



国際ビジネス論、新興市場ビジネス論専攻。民間企業での国際事業の実務を経験(15年間)したのち、本学にて研究教育職に就く。ほどよく危険な環境にたまに身を置くことと、ビジネスのダイナミズムに触れるときに喜びを感じます。